

# 看護学生の終末期看護学習に関する知識の形成過程

——講義後のレポート記載内容の分析——

原 田 江 梨 子<sup>1)</sup>・田 墨 恵 子<sup>2)</sup>

藤 永 新 子<sup>1)</sup>・安 森 由 美<sup>1)</sup>

## Process of the Acquisition of Knowledge about Terminal Stage Nursing Care among Nursing Students: An Analysis of Students' Reports After Class

HARADA Eriko, TAZUMI Keiko, FUJINAGA Shinko and YASUMORI Yumi

**Abstract:** To elucidate the changes in recognition of terminal stages among nursing students, and to examine effective educational methods. Informed consent was given by a total of 63 students (86.3%) who had finished a class on “Nursing care for patients in terminal stages”, held in July 2010. Their reports on the relevant topic were assessed in terms of how they recognize terminal stages.

The following results were obtained.

1. Most reports focused on cancer patients and/or nursing professionals. In most students, after the class, a negative/avoidant image of terminal stage patients changed to a positive one. Similar changes were observed in the role and requisites for nurses.
2. Practical and attitudinal requirements for either those concerned with cancer patients or nursing professionals were described in 49 and 30 students, respectively.
3. In terms of a must in the future, most students realized the issues related to patient-nurse relationship, and the acquisitions of relevant knowledge and skills.

**Key Words:** Terminal stage nursing care, nursing students, process of acquisition of knowledge

抄録：平成22年7月に実施した、「終末期にある患者の看護」の講義終了後に課したレポート内容から、終末期看護に関する知識獲得に効果的な授業方法について検討するため、協力が得られた63名のレポート記述内容を分析し、学生の終末期看護に関する認識の変化を明らかにした。

1. 学生のレポートの記述内容は、がん患者と学生自身を含めた看護者に関する内容が大半を占めていた。がん患者に関しては、講義前の回避的あるいはネガティブなイメージが、講義後はポジティブなイメージに変化した者が多くいた。一方、看護者に関する記述内容は、講義前ネガティブだったのに比して、講義後はポジティブで看護介入に必要な要素についての記述が増加していた。
2. 実践面と態度面で必要なことを49名ががん看護に携わる全ての者に、看護者には30名が実践面と態度面、家族には精神面で必要なことを13名が記述していた。
3. 自分自身の今後の課題について、「がん患者との関係に関する内容」、「知識の習得」「技術の獲得」の実践面を記述していた。

キーワード：終末期看護、看護学生、教育方法、認識の変化

<sup>1)</sup>甲南女子大学看護リハビリテーション学部 看護学科

<sup>2)</sup>大阪大学医学部付属病院 オンコロジーセンター 看護師長

## I. はじめに

終末期に関する知識の習得段階で臨床経験の乏しい看護学生の看護観は、講義や演習の内容だけでなく、日常生活および臨床実習での体験が影響して、患者への態度やケアに偏りを生じることが少なくない。また、臨床実習での体験は、学生の看護観や死生観に影響するだけでなく、臨床実習体験後の学習に取組む姿勢に反映されるため、臨床実習では学生個々の知識および対象の捉え方（認識）を把握して指導する必要がある。看護者に必要な態度形成につながると考えられる。

今回、成人看護学領域のうち、終末期看護の教育方法について有用な知見を得るため、終末期看護に関する講義終了後に作成したレポートの記述内容から、終末期に関する学生の認識の変化について明らかにし、効果的な教育方法について検討した。

## II. 研究目的

終末期看護に関するレポートの記述内容から、講義前後の学生の認識の変容を比較し、終末期看護の効果的な授業方法について検討した。

## III. 研究対象および研究方法

### 1. 研究対象および期間

研究対象は、成人看護学領域の慢性期・終末期の講義で、「終末期にある患者の看護」を受講し、講義終了後に課したレポートを提出した学生73名のうち、本研究について説明し、同意が得られた学生66名のレポート内容である。

### 2. 研究方法

1) 平成22年4月から3年次生対象に開講した成人看護領域の授業において、がん看護専門看護師による「終末期にある患者の看護」の講義終了後、「終末期看護」に関する課題レポートを作成させた。

2) レポートを評価して返却後、受講学生に対して本研究の主旨を説明し、同意が得られた69名の学生のレポートを選出し、レポートの設問ごとに記述内容からキーワードになる内容を抽出した。

3) 得られた結果をもとに、講義前後での記述内容を比較して学生の認識の傾向を明らかにし、終末期看

護に関する授業について検討した。

### 3. 倫理的配慮

成人看護学領域の慢性期・終末期の講義を受講した学生73名に対して、レポートを含めた授業の評価終了後、(1) 本研究の主旨・匿名性 (2) 使用方法 (3) 同意は自由意志であり、断ることで成績評価での不利益を生じることがないこと、個人を特定／プライバシーを侵害することなく活用することを一斉に説明し、説明内容を記載した紙面および同意書を配布した。その後、了解が得られた学生には同意書を提出してもらい、同意が得られた学生のレポートをもとデータとして活用した。なお、本研究に取組む前に本学倫理委員会の承認を得ており、データの活用に着手した。

### 4. 講義の概要について

「終末期にある患者の看護」の講義概要を資料に示した。講義内容および講義担当者については、成人看護領域のうち慢性期・終末期の講義を担当する本学科看護教員3名で検討し、臨床現場で実践しているがん看護専門看護師に講義対象および講義内容について説明、本学科の授業概要にそって講義されるよう依頼した。

## III. 結 果

「終末期にある患者の看護」の講義終了後にレポートを提出した学生73名のうち、本研究の要旨説明後に同意が得られた学生は66名（回収率90.4%）であり、設問にそって記述されている63名（有効回答率86.3%）のレポートについて分析した。なお、「終末期にある患者の看護」の講義終了後のレポート課題は、1. 「がん患者の看護」について講義前と比較した内容、2. がん看護に携わる人に必要なこと、3. 今後・自身に必要な取組みについて自由形式とした。

### 1. 「終末期看護」に関する講義前後のイメージの変化

「終末期にある患者の看護」の講義を受けて感じたことを講義前と比較しながら記述内容からキーワードになる内容を抽出したところ、看護の対象であるがん患者（以下、がん患者とする）および看護に携わる看護者あるいは学生自身（以下、看護者とする）、がん看護に関わる者や組織についてだった。

1) 終末期看護に関する記述内容の講義前後での比較

がん患者に関する記述内容について講義前後で比較した結果を図1-①に示した。がん患者に対して、講義前は「死」「暗い」「戦い」「終末期」「悲しい」「マイナスイメージ」などネガティブな記述が多かったのに比して、講義後はネガティブな記述は殆どなく、「人生を全うする」「生ける尊さ」「希望がある」などポジティブな記述だった。また、講義前は「特別な看護が必要」「抽象的なイメージだった(抽象的)」と記述した者が、講義後には「個別性がある(個別性)」

「がん看護が具体的にわかった(具体化)」,あるいは「イメージが変容した(イメージの変容)」と意識の変化を記述していた。

2) 看護者に関する記述内容の講義前後での比較

看護者に関する記述内容について、講義前後で比較した結果を図1-②に示した。講義前、「つらい」「難しい」「恐怖」など回避的なイメージを記述する反面、13名が「緩和ケア」と漠然としたイメージ、2名が「寄り添う」「支える」と受容的なイメージを記述していた。比して講義後では、「難しい」と記述した者は2名で、16名が「寄り添う」「支える」と記述し、「役

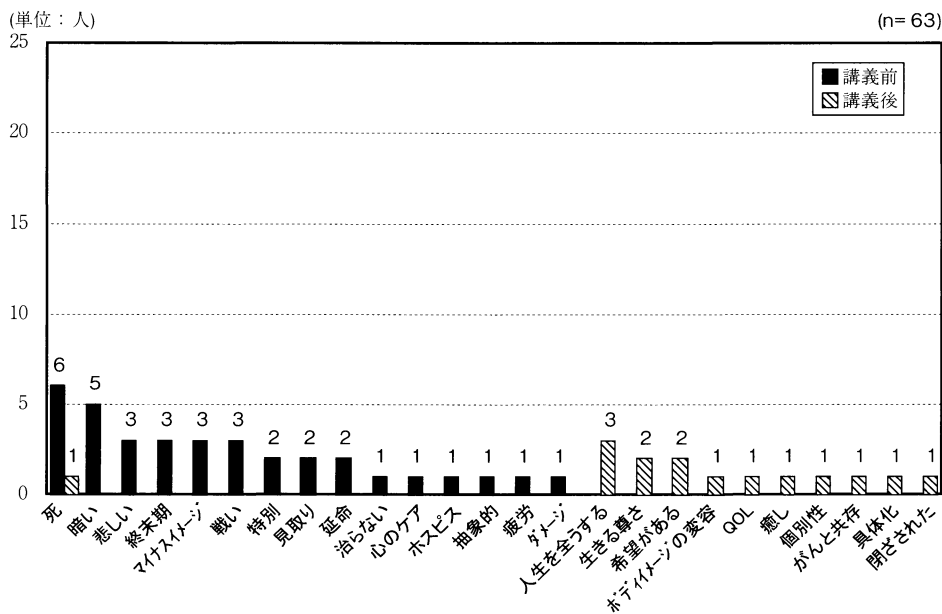


図1-① がん患者に対するイメージの講義前後での比較

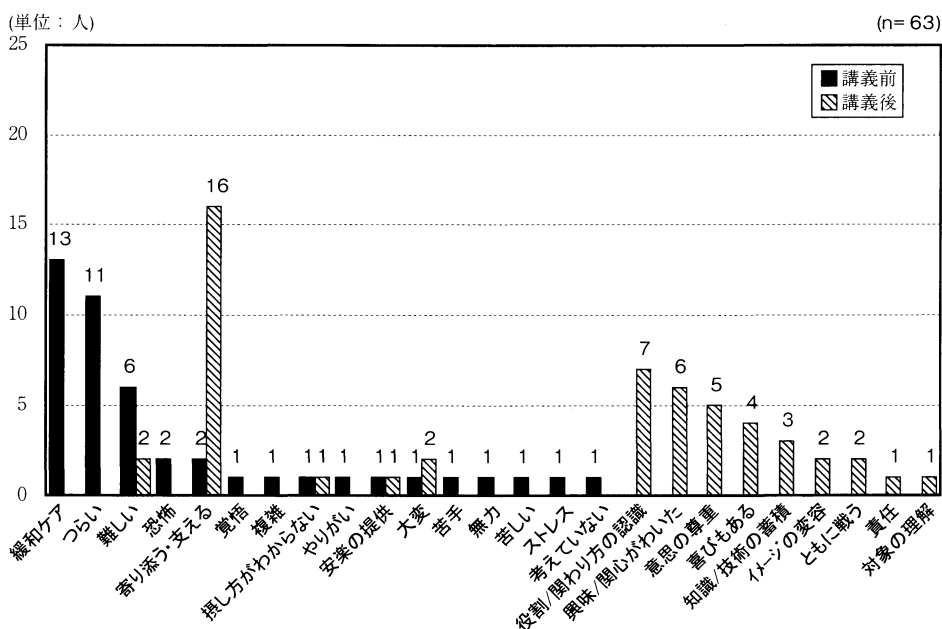


図1-② がん看護に携わる看護者に対するイメージの講義前後での比較

割／関わりを認識」「興味／関心がわいた」「意思の尊重」「喜びもある」とポジティブな記述があり、「知識／技術の蓄積」「ともに戦う」と、看護する上で必要な「能力・態度・実践」について記述していた者もいた。

3) がん患者と関わる者および組織に関する記述内容の比較

がん患者と関わる者および組織に関する記述内容について、講義前に関しての記述はなく、講義後に「寄り添う」「家族」「人間関係」「チーム」などキーワードの記述だった。

以上のことから、「終末期にある患者の看護」の講義後、「がん看護」に関して作成されたレポート内容には、がん患者と看護者に関する記述内容が大半を占め、講義前はがん患者に対するネガティブなイメージや看護者に対する回避的なイメージが、講義後はがん

患者・看護者ともにポジティブなイメージの記述に変化していた。また、看護者に対する記述内容には、看護を実践する上で必要な内容が記述されていた。

2. 終末期看護に携わる対象に必要なこと

「がん看護に携わる人に必要なこと」について、記述内容からキーワードになる内容を抽出したところ、看護者および医療者、がん患者の家族、そしてがん患者に携わる対象全ての者（以下、全ての人とする）、地域／組織について記述されていた。記述内容の総数は全ての人が49名で最も多く、看護師30名、家族13名の順に必要な内容を記述していた。そこで、終末期看護に携わる対象に必要なことを対象別に分類し、看護者は図2-①、医療者は図2-②、がん患者の家族は図2-③、携わる・関わる全ての人は図2-④にそれぞれ示した。その結果、看護者には、「意思の尊重」

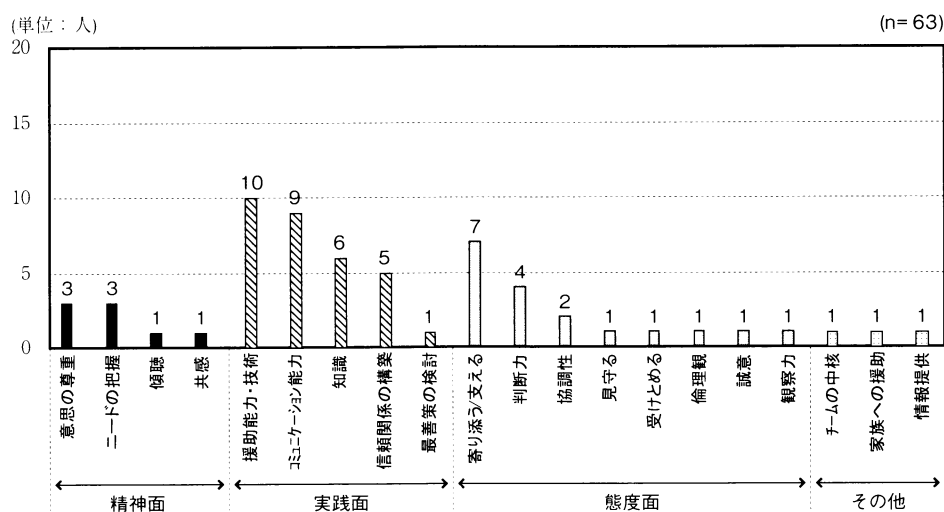


図2-① がん看護に携わる看護師に必要なこと

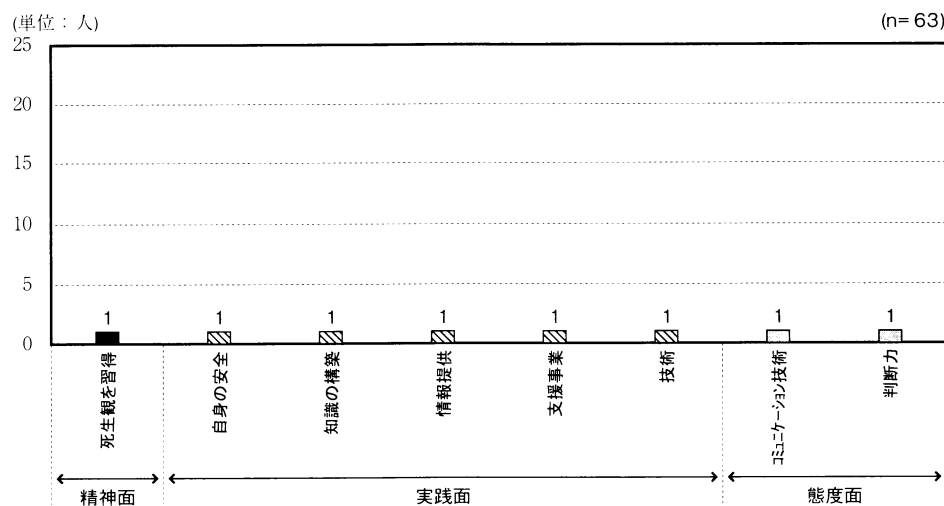


図2-② がん看護に携わる医療者に必要なこと

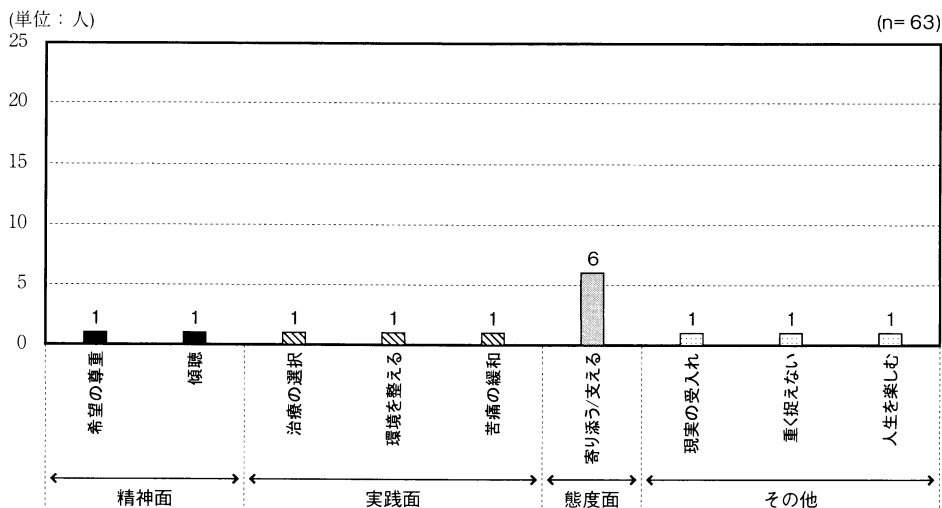


図 2-③ がん患者の家族に必要なこと

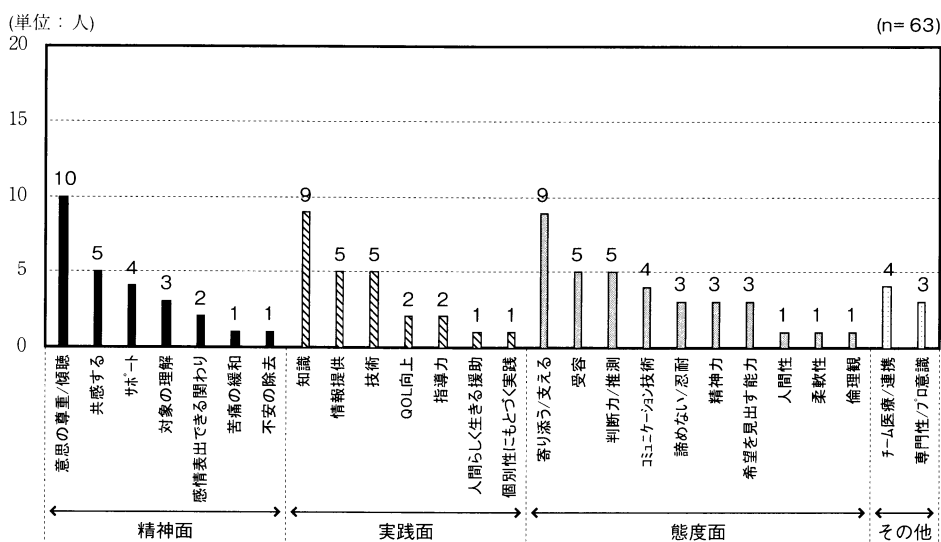


図 2-④ がん看護に携わる全ての人に必要なこと

「ニーズの把握」などの精神面、「知識」「技術」「コミュニケーション能力」の実践面、「寄り添う/支える」「判断力」「協調性」の態度面で必要なこと、「医療チームの中核」「家族への援助」「情報提供」など他者とがん患者の連携の役割を記述していた。一方、医療者に必要な精神面・実践面・態度面全てにおいて記述が少なかった。またがん患者の家族には、「寄り添う/支える」などの精神面と、「環境調整」「苦痛の緩和」の実践面、地域には「情報提供」「資源活用」と少数の記述だった。他方、がん看護に携わる全ての人に必要ことの記述は多く、「意思の尊重」「共感」「サポート」など精神面、「知識」「情報提供」「技術」などの実践面、「寄り添う/支える」「受容」「判断力」「傾聴」などの態度面のほか、医療者間の連携についてだった。以上のことから、レポートの記述内容は職種や役割に限らず、がん看護に携わる全ての対象に精神面

と実践面で必要なこと、加えて、看護者と区別して、医療者には態度面で必要なことを記述していたことがわかった。

### 3. 学生が自分自身に対する今後の課題

今後、学生が自分自身の課題と考えて記述した内容について、キーワードを抽出して図 3 に示したところ、がん患者に対する自分の課題およびがん看護に関する学生自身の課題に関する記述だった。がん患者に対する課題については、「信頼関係の構築」「思いを知る/傾聴」「対象の理解」など実践に関する課題、「疾患の理解」など知識の獲得に関する記述だった。一方、がん看護に関する学生自身の課題については、「技術の獲得/深める」と実践に関する課題を 33 名が記述し、「コミュニケーション能力」「判断力」の実践面、「受容」などの態度面の課題に関する記述は少数

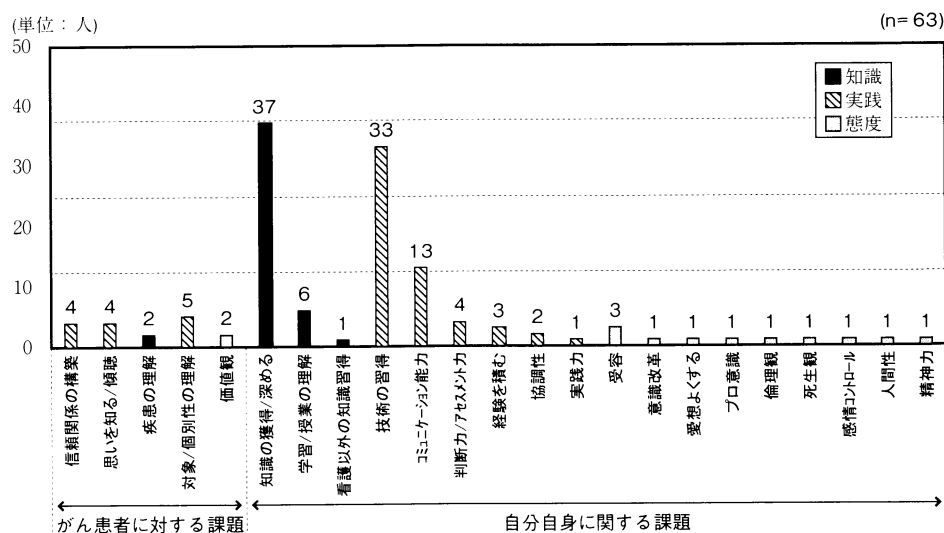


図3 がん看護に関する今後の課題

だった。

#### IV. 考 察

##### 1. がん看護に関する講義受講後の学生の認識の変容

「がん看護」に関する講義を受けた学生の認識について、がん患者に対する回避的なイメージは減少して受容的なイメージに変容した者が多かった。今回、レポートを採択した学生63名のうち、終末期患者を受持った経験者は3名、近親者の死を経験した者は7名と、「終末期にある対象に関わる経験」は殆どない状態で、がん専門看護師の「がん看護」に関する講義を受けた。講義の概要について資料に示したが、がん看護の実践例を取り入れて展開し、終末期にある対象の看護に必要な知識だけでなく、実践および態度も意識づけできるよう試みた。また、レポート作成が受講直後であるため、資料に示したように、がん患者の生き方あるいは治療から日常生活の援助まで多岐にわたるケアの実際についての講義内容が反映されて、講義後のがん患者に関するイメージが学生間にばらつきがない・似かよったイメージの傾向に示したと思われる。また、看護に対するネガティブなイメージも、講義後はポジティブな内容に変化していることから、偏った看護の対象の捉え方から変容させるきっかけになったと思われる。これは、「看護学生のもつ死に対する態度は死に対するイメージや死の経験に影響され、臨床実習における終末期の患者ケアに反映されることが予測される。」そして、「終末期看護への興味や関心は漠然・不確かなものであるため、学生個人の性格への配慮が看護基礎教育における死に対する態度形成におい

て重要である」と原田<sup>1)</sup>らが述べている。臨床実習では、疾患あるいは健康段階だけでなく、さまざまな問題をもつ対象を受持つため、学生は予想できない臨床現場で経験を積んでいく。臨床実習での経験が、回避的でネガティブなイメージの蓄積になり、学生自身の人生観にも悪影響することがないように、実習前の講義では看護の対象が適切にイメージできることも考慮した講義内容の必要性が示唆された。このことから、終末期看護の講義による意識の変化を明らかにするだけでなく、臨床実習後の終末期看護に関する認識および態度について明らかにし、看護観および死生観を形成できるように教育方法を工夫することが重要であると考えられる。

臨床実習では、疾患あるいは健康段階だけでなく、さまざまな問題をもつ対象を受持つため、学生は予想できない臨床現場で経験を積んでいく。臨床実習での経験が、回避的でネガティブなイメージの蓄積になり、学生自身の人生観にも悪影響することがないように、実習前の講義では看護の対象が適切にイメージできることも考慮した講義内容の必要性が示唆された。

##### 2. 看護に携わる対象および内容について

学生自身を含んだ看護者だけでなく、がん患者に関わる全ての対象に対して必要なことを記述している学生が多くいた。がん患者に限らず、看護の対象にはさまざまな職種がそれぞれの役割・機能を果たすよう関わり、健康問題の解決を目指している。従って、適切な看護の提供には対象をとりまく他職種との連携の必要であり、他職種の役割・機能を理解した行動を意識できること大切である。また、対象との関わりは看護

者－患者の援助関係にとどまらず、対象をひとりの人間として尊重するだけでなく、がん看護に関する教育では対象のもつ死への思いを受容・共感する態度の育成が望ましいと考えられる。

### 3. 今後の自分自身の課題について

レポート記述内容に、態度面および知識・技術の獲得の必要性を自覚している者が多くいた。提供される看護の実践内容は看護者の知識および技術能力が反映する。前述したように、看護の対象の価値観や人生観を尊重する態度を育成するとともに、学習段階にある学生が看護者同様、適切な看護が提供できるよう、臨床実習前に終末期にある対象を想定した授業を実施することが大切である。また、臨床実習前の講義は「対象の価値観・人生観を尊重して尊厳ある行動を可能にするための援助を学生ができるレベルで可能な援助を実施することで体験がスピリチュアリティに気づく契機になる。」「死について考え、スピリチュアリティに気づく契機、死の準備教育における第1段階：専門知識の伝達（知識）レベル」と井福らは述べている<sup>2)</sup>。つまり、学生ができるレベルで可能な援助を事前に経験あるいはイメージすることで、終末期看護の経験が乏しい学生の偏った先入観を修正し、臨床実習での経験が望ましい看護観形成につながり、学生個々の人生観の育成になると考えられる。

## V. 結 論

終末期看護の講義後のレポート記述内容から学生の認識について分析したところ、がん患者に関して講義前には回避的あるいはネガティブなイメージだったが、講義後はポジティブなイメージに変化した者が多く、看護者に関しても講義前ネガティブだったのに比して、講義後はポジティブな要素についての記述が増加していた。また、がん看護に携わる全ての対象には実践面と態度面、看護者に精神面と実践面と態度面、家族には精神面で必要なことをそれぞれ記述していた。さらに、多くの学生ががん患者との関わり方および自分自身の知識・技術の獲得などがん患者の看護に必要な実践面の課題を記述していた。

現在、成人看護学領域において、終末期看護の講義は慢性期看護の30回の講義のうち、「慢性期看護の考え方および慢性疾患患者の特徴」の講義、「化学療法を受ける患者の看護」「放射線療法を受ける患者の看護」

で治療を受ける患者の看護について、「がん患者・終末期にある患者の看護」で終末期にある対象の看護に必要な知識および実践、態度についてそれぞれ1コマずつ・90分の講義を展開している。看護の専門知識を獲得する授業であると同時に、学生自身の人生あるいは死の準備教育の機会にもなるため、臨床実習後の振り返り学習など臨床現場の現状にそった講義の組立てが課題である。

### 引用・参考文献

- 1) 原田真澄：看護学生の死に対する態度に関連する要因－死のイメージ、性格、死の経験との関連から 日本看護医療学会雑誌 2005; 7(2)：17-26
- 2) 井福ゆか、安藤満代、井手信、松尾詩子：終末期看護における看護学生のスピリチュアリティ育成への学習支援 聖マリア学院紀要 23 2009; 65-67
- 3) 完山妙香：看護学生の終末期看護実習における認知の分析 神奈川県保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 2005; 30: 69-76
- 4) 新谷奈苗：終末期看護学実習による看護学生の終末期看護についての意識変化 日本医学看護教育学会誌 2005; 14: 50-56
- 5) 安藤恵子：成人看護学終末期実習におけるレポートからみた看護学生の学び 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌 2007; 3: 224-227
- 6) 大庭桂子：看護学生の死生観とターミナルケアに対する意識 日本看護研究学会雑誌 2010; 32(3) 297
- 7) 渡邊千春：終末期実習に対する看護学生の構えに関する研究 日本看護研究学会雑誌 2010; 185

### 資料

<p>講義概要：総合病院におけるがん患者の看護 －がんと共に生きる人をケアすること－</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の内容             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) がん看護を提供するシステム</li> <li>2) 事例紹介</li> </ol> </li> <li>2. 病期・治療によるがん看護の分類             <p>予防期、診断期、周術期、化学療法、放射線療法、化学療法、造血幹細胞移植、ターミナル期</p> </li> <li>3. 疾患によるがん看護の分類             <p>消化器系のがん、乳がん、婦人科系のがん、肺がん、造血器系のがん、泌尿器科系のがん、脳腫瘍 など</p> </li> <li>4. がんと共に生きる人をケアする             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 身体的側面</li> <li>2) 心理的側面</li> <li>3) 社会的側面</li> <li>4) 霊的側面 (Spiritual)</li> </ol> </li> <li>5. 患者の QOL を高めるための看護の実践             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 治療提供</li> <li>2) 日常生活援助、セルフケアの支援</li> <li>3) 意志決定の支援</li> <li>4) 体験の意味づけの支援と理解</li> </ol> </li> <li>6. がん看護を行うために必要な知識と技術             <p>コミュニケーション技術、洗練された基礎技術、豊富で Up to Data された知識、臨床判断能力、チーム医療を実践できる協調性、倫理観 (誠実さ) など</p> </li> </ol>
---